

1. 人々の暮らしの今

滋賀県において、農山漁村の暮らしは、琵琶湖総合開発(p226「9-5」参照)などを経て、現在までに大きく変わってきました。

かつて水路や井戸の水を使って生活した頃、水路や井戸は使う人々が共同で維持管理しました。水道が公共インフラとなった現在では、お金を払えば蛇口をひねるだけで水を得ることができます。かつて田植えや稲刈りを手で行っていた頃、近所や親戚同士がお互いに手伝い合い大勢で行いました。圃場整備が進み、農業の機械化が進んだ現在では、田植えも稲刈りも機械さえあれば一人でも行うことができます。

また、生業も変化しました。外へ勤めに出ることも、在宅で外と繋がって働くことも当たり前となり、同じ集落の中にも様々な職業の人が暮らしています。

かつては暮らしていくためになくてはならないものだった人々のつながりは、現在においては当たり前ではなくなりつつあります。人と自然とのつながりは実感しづらくなり、人と人とのつながりの必要性は感じづらくなったといえるでしょう。

2. 集落のつながりの今

現在、特にいわゆる条件不利地域においては、空き家が増え高齢化が進んでいます。耕作放棄地が増えたり、従来通りに祭りを続けることが難しくなったりと、これまで集落の中で受け継がれてきた様々な事柄を次世代に繋ぐことが難しくなっている場合も少なくありません。

一方で、農山漁村ならではの暮らしの

価値が改めて見出され、人々を惹きつけています。その土地でとれる食材の味わいや、景観の美しさ、農地が同時に多くの生き物のすみかとなっていることなど、暮らしの中で生まれ受け継がれてきた価値はさまざまであり、また、その土地に固有のものも多くあります。

こうした中、その地域の資源に関心のある人々が集い、地元だけでなく外部の人も含んだ有志が協働して、何かを継承したり、再生したりしようとする実践が数多く行われています。

例えば、集落側と、大学や企業等との間でパートナーとして協定を結び協働活動を行う「しがのふるさと支え合いプロジェクト」では、2023年度末までに29の協定が結ばれ、棚田保全や遊休農地の活用などに協働で取り組んでいます。活動の積み重ねを通じて互いの関係性や信頼が深まれば、外部者であっても地域の中で一定の役割を担う存在となる場合があります。

住んでいる人が少なくなり、その場所にかかわること、その場所ですぐつながることを当たり前とする人が少なくなった、その余白の中で、資源とのかかわり、人とのつながりの新しい形が、様々な模索されています。



写真T-1 山間の棚田

琵琶湖博物館 大久保 実香